

自己評価報告書(最終報告)

コース等名

言語系コース(国語)

記載責任者

小島 明子

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員就職率向上方策について

本学は第二期中期目標・中期計画において、「学士課程において教員就職率を70%以上にする」と明記している。教師を目指す学生が一人でも多く自己の進路希望を実現できるよう、この数値目標を達成するのはもちろんのこと、より一層教員就職率を上げるため、貴専攻・コースではどのような取り組みを行うか。具体的な方策を示してほしい。

1. 目標・計画

就職支援室で提供される取り組み以外に、国語コースでは次のような支援を行う。

- コース内で、学生の要望に応じ、模擬面接、集団討議の指導助言、小論文指導を行う。
- 年度始めに学年別オリエンテーションを行い、修学及び就職に関する心構え、学習方法、生活のあり方について指導する。
- 各教員の授業で、4年間のカリキュラムを見通して、教育現場の実践に生きる内容を精選し、授業内容に盛り込む。また、演習発表・模擬授業と質疑・討議など、学生が主体となる学習形態を効果的に配置した授業を展開する。

2. 点検・評価

○コース内で、学生の要望に応じ、模擬面接、集団討議の指導助言、小論文指導を行った。

○4月9日に学部・院の新入生オリエンテーション、4月10日に学部2～3年生、4月15日に4年生の学年別オリエンテーションを行い、修学及び就職に関する心構え、学習方法、生活のあり方について指導した。

○教育実践コア科目では、4年間のカリキュラムを見通して、教育現場の実践に生きる内容を精選し、授業内容に盛り込んだ。また、「語学・文学総合演習」を中心とした専修専門科目では、演習発表・模擬授業と質疑・討議など、学生が主体となる学習形態を効果的に配置した授業を展開した。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

国語コースの学生が、有意義で実りある学生生活を営むことができるように、コース所属教員全員が連携して修学・就職支援を行う。

○学部学生・大学院生の就職支援のために次の活動を行う。

・学年別オリエンテーションを実施し、教員採用試験に対する受験勉強の計画法・学習方法・受験都道府県(市)の選び方、また、就職活動全般に対する心構えなどを指導する。・就職ガイダンスの実施に対して、積極的に支援する。・コース所属教員が、採用試験対策(小論文・模擬面接・模擬授業の指導など)を積極的に行う。

○教員と学生間で積極的にコミュニケーションを図り、良好な人間関係を構築する。

○ゼミ室・院生研究室などの学習環境の向上を図る。

2. 点検・評価

○学部生に対して、4月に学年別オリエンテーションを開催し、一年間の学習生活について指導した。特に3年生に対しては、教育実習を控えての心構え、4年生に対しては、教員採用試験をはじめ、就職活動全般に関する諸注意(受験勉強の計画と学習方法、受験自治体の選び方など)を行った。

○大学院生に対しては、特に教育実習を控えた長期履修生の履修科目についての指導・助言を行った。

○就職支援室主催の就職ガイダンスなどの諸行事を積極的に支援したほか、学生からの要望に応じて、採用試験対策の指導(自己PR文作成、小論文添削、模擬面接・模擬授業指導)を行った。

○教員・学生の間での積極的なコミュニケーションによって、良好な関係を築いた。

○大学院生研究室のパソコン・プリンタを更新したほか、言語実験室・国語ゼミ室に教科書などの図書を配架し、学習環境の向上に努めた。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

国語科教育学、国語学、国文学、日本語教育学等の各分野において学会に寄与し、また社会の要請に応えるために、次のような活動を行う。

○第28回鳴門教育大学国語教育学会を開催し、機関誌『語文と教育』第27号を刊行する。

○コース所属の教員それぞれが、科学研究費補助金を申請する。すでに交付を受けた教員は、当該課題の研究を推進する。

○「鳴門教育大学リポジトリ」等を活用し、研究成果の積極的な公開を進める。

○国語科教員養成に資する共同研究を進める。

2. 点検・評価

○第28回鳴門教育大学国語教育学会を、平成25年8月24日に開催した(於本学講義棟、研究発表7名)。また、9編の論考を収めた『語文と教育』27号を刊行した(8月30日)。

○平成26年度科学研究費補助金について、研究代表者として3件、研究分担者として1件の計4件の課題を新規に申請した。また、平成25年度は、研究代表者として4件、研究分担者として4件、計12件の研究を推進した。

○「鳴門教育大学リポジトリ」において、『國傳山寶珠院地藏寺所藏文献目録[上・下冊]』、『寶壺山願勝寺所藏文献目録』、『同 索引編』、学会機関誌『語文と教育』27号を公開した。また、コースウェブページの教員紹介から論文本文へのリンクを拡充した。

○文部科学省特別経費(プロジェクト分)「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」の一環として、カリキュラムマップの作成と教科内容学テキストの作成に貢献した。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

- コース所属教員それぞれが、各種委員会及びワーキンググループの委員や主査として、当該委員会等の会議に出席し、その職務を積極的に遂行する。
- 教員免許更新講習(選択領域)の複数開講、公開講座の複数開講を行い、その運営を積極的に行う。
- 「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」の計画・実施に積極的に協力する。

2. 点検・評価

- コース所属の教員それぞれが、各種委員会やワーキンググループの委員として当該の会議に出席し、その職務を積極的に遂行した。
- 教員免許状更新講習(選択領域)において、コース所属教員が、「絵本とその読み聞かせの教育的効果」、「子どもの発達段階に応じる音読・朗読と絵本の読み聞かせ」、「国語科教育におけるリテラシーのとらえ方」を開講した。また公開講座「知ってるようで知らないことばの世界」を開催した。さらに、徳島県・大学等連携による教員研修を複数のコース所属教員が担当し、コースとして円滑な大学運営に協力した。
- コース所属教員全員が、「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」の計画・実施に貢献した。
- 教育支援人材認証協会の事業について、事業が円滑に進行し成果をあげられるように協力し、コースの教員が、認証講座「こどもサポーター(読み聞かせ)」を担当した。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

- 日常業務の研究交流や学部・附属国語科連絡協議会(原則年2回)を通して、大学教員と附属学校園教員との連携体制を維持・発展させ、教育・研究に関する意見交換を積極的に行う。
- 地域の教育機関や各種校園との交流を図り、各種研修や公開講座などを開くとともに、地域の日本語学習者に対して積極的な支援活動を行う。
- JICA受託研修(アフガニスタン、ケニア)、専門家派遣(ルワンダ)などの国際協力事業に貢献する。
- 協定校など、海外の大学からの留学生を受け入れ、交流を図る。

2. 点検・評価

- 平成25年6月と平成26年2月に学部・附属国語科連絡協議会を開催し、附属校園との情報交換と研究協力を図った。また、コース所属教員が、附属中学校の授業(「選択国語2年」)を附属中教員と共同で担当した。
- 地域の教育機関や各種校園との交流を図るとともに、地域の教育活動にかかわる各種事業にコース所属教員が積極的に参与した。担当した各種研修や公開講座は、県内外において50回以上になる。
- 本学が受託したJICA本邦研修2件(国別研修ケニア「初等理科指導法改善」、国別研修アフガニスタン「教師教育強化プロジェクトフェーズ3」)において、コース所属教員がコースリーダー、ファシリテーターとして参加した。
- ケニア研修中、本学主催「なるっ子わくわく教室」において、「ケニアを知ろう、アフリカを知ろう」と題する講座を企画実施し、児童生徒とケニア研修員の交流を図った。参加した保護者からは来年もぜひ実施してほしいとの要望が寄せられた。
- JICA技術支援プロジェクト「トゥンバ高等技術専門学校強化支援プロジェクト・フェーズ2」に、コース所属教員が専門家として派遣された。当該教員の不在中は、本学業務に支障が出ないように他の教員が協力した。
- 大学間交流協定締結校である青島大学から2名、シーナカリンウィロート大学から2名、コンケン大学から1名、計5名の短期留学生(学部特別聴講学生)を受け入れ、学生間の交流を図った。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

○国語コースでは、学部生の教員就職率を高めるための取り組みを継続してきた。その結果、平成22年3月卒業生以降の教員就職率(括弧内は進学者を除いた教員就職率)は以下のように推移しており、着実な成果を上げつつあると考えられる。

平成22年3月卒業生92.9%(92.9%)、平成23年3月卒業生85.7%(92.3%)、平成24年3月卒業生76.9%(100%)、平成25年3月卒業生71.4%(90.9%)

平成26年3月卒業生については最終的な教員就職率は未確定であるが、これまで同様の数値が達成できるようコース一丸となって努力した。

○コース所属教員が児童図書館の運営の中核となって、学生ボランティアによる季節行事や絵本の読み聞かせなどの子育て支援や地域貢献活動を継続して推進している。その活動については、平成25年度実施の大学機関別認証評価報告書において、本学の「特に優れた点」の一つとして高く評価された。

○JICA本邦研修・JICA技術支援プロジェクトなどにおいて、コース所属教員が主導的な役割を果たし、本学の国際交流事業に顕著な貢献をなした。